

「相手の感情と身体」を理解する脳をつくる  
～動物飼育体験活用教育のあり方と成果～

全国学校飼育動物獣医師連絡協議会  
主宰 中川 美穂子  
(全国学校飼育動物研究会\* 事務局長)

1 「動物らしさ」への理解のなさ

日本ではもうしばらく以前から、「動物は好き」だが、本物には触れず、抱いたとしても、小さな子猫の小さなツメが当たれば、「痛い」と投げ捨てる子どもが見られていた。また、「台風一過だね、先生」と言う5歳児が、初めて抱いたウサギのスイッチを探したとか、小学校のウサギを抱いた後に複数の1, 2年生が「ウサギは何でできているの?」「どうして動くの?」と質問したとか、「ペット動物はマリモ」と答える何人もの4年生、「ウサギは卵で産まれる」と言う6年などが、大人たちを仰天させてきた。

また「暖かい血の通った生き物を最初に抱いたのは、我が子が初めて」と話す若い母親が増えており、子育て支援などと共に、新生児への接し方の「ケアトレーニング」が繁盛している。あの悲しい佐世保市の事件では、加害者が「(被害者に)会ったら謝りたい」と話し、その生命感の未熟さに驚かされたが、その後も車の中に子どもを置き去り熱中症で死なせたり、オートバイの座席の中に1歳の子を入れて窒息死させたりと、思ってもみない事件が続発している。これは若い親世代を含めて、人をふくんだ「動物らしさ」を理解できない人たちが出現していることを顕しており、対応として、特に生命観や相手を大事にする感性(愛情・愛着)を培う様々な教育努力がなされてきた。

しかし、命の大切さは知的言葉では伝わらず、「感性」を言葉で教えることはできない。昔から、子どもの成長(感性を培う)には「草や木、花、水、風、石、など」の自然体験と「動物」体験が重要と言われているが、動物(特にほ乳類と鳥類)は、「優しくすれば懐いてくれる」などの感情を顕すため、「我と彼」を直接子どもの心に伝え、「相手の感情と身体」を理解させる基本的な体験であった。古来子どもは動物と戯れて育ってきた。しかし、ペットブームと言われる今、子育て家庭の7割以上が、世話の面倒さや「動物は不潔」との誤解から、すでにこの種の温血動物を飼育せず<sup>\*1</sup>に、代わりにタマゴッチや機械の動物を子どもに与えてきた。

一方、最近の脳科学では、情動(人の心)は5歳ごろまでに形作られ、特に10歳までの環境が大事だと告げている。子どもを取り巻く大人たちは、子どもが動物を飼いたがる時期こそ脳・感性が構築される期間だと認識して、その「幼児から小学校中学年の」重要な時期に必ず動物体験も与え、弱いものを愛し庇い育てる立場に立たせ、「動物らしさ」「もの言えぬものの気持ちを洞察し、大事にする態度」を体得させる必要がある。そのための「学校の動物飼育活動」で、伝統的に、殆どの学校はチャボやウサギなどの抱ける温血動

物を飼育してきたのだろう。

## 2 言葉と体験：意図的な教育計画が必要

平成19年1月に「地域の獣医師の支援を得て全4年生が動物飼育をする学校群の子たちは、高学年の委員会のみが飼育する学校群の「飼育しない4年生」に比べて、学期末には動物への共感度はもちろん、人への優しさ（向社会性）も有意に向上していた」と発表され<sup>\*2</sup>、ウサギやチャボの飼育体験の教育的な効果が客観的に裏付けられた。両群ともに道徳教育があるが、動物飼育活動の体験があつてこそ、子どもたちの向社会性が有意に向上したのだ。

なお、この調査対象校に、総合の学習の「命と人権の教育」の基礎単元に飼育活動を活用した事例が入っていたので、その方法を紹介する。

### 1) 一学期

#### 保護者の理解を得る

春の保護者会で、校長、学年主任ともに、「この学年では命の教育のために動物飼育活動を行う」と目的と方法を伝え、子どもと協力して休日の世話を共に担当するように要請。これは、「命には休みがない」ことを、わが子に理解させるために必要であり、同時に親が「子どもが大事にしている動物に気持ちをかける」ことで、親子の良い会話を期待するために行う。

#### 飼育導入授業（ふれあい教室）

獣医師の「動物の話」の後、子どもたちに動物を抱かせて、その感触を通して生き物への関心を誘う。また、これ以後、子ども達が情をもって動物の世話をすることで、より観察が細くなり、動物の営みを理解し弱いものへの思いやりや接触した喜び、生物にたいする科学的興味を培うよう期待する。また親に補佐を求め、動物の感触と子どもの反応を見てもらう。

方法：45分授業のなかで、動物の話しと抱き方を獣医師が伝えて、実際に心臓の音を拡大機で聞かせて命を実感させる。次に児童を10人ほどの班に分けて、それぞれに補佐（保護者と教師・事前に獣医師の手ほどき済み）と学校の飼育動物（ほ乳類やチャボ）1頭を手当して、「動物と児童の両方を安心させるように」丁寧に膝の上で抱かせる。なお、かけ算できる学年では一分間の心拍数を計算させて、大人、子ども、動物の比較をさせる。

#### \*動物の話しのポイント

・自然界では、動物は寝起きする場に排泄しないが、学校の動物は狭い所で生活しているので、人がきれいにしてあげる。（労働・協力・達成感）・人間は一日3回食べる。動物も空腹になるので、朝に餌と水を与え、午後は清掃して餌と水を与える。雑菌の増殖を防ぐため毎日水入れや食器内側を特によく洗う。（衛生知識・科学的な刺激・想像力・おもいやり）・人と同様に休日もお腹がすく。命に休みはないので保護者と一緒に世話をあげる。（生命維持・責任感・親子の対話・親の愛情を感じる・感謝）・動物は話せないから、人が

「何をして欲しいか、困ってないか」など、体と表情から洞察する。(観察・洞察・心的視点移動)・動物は、体の大きな存在の「人」をととも怖がっているので、安心させるように、優しい気持ちで静かに動き、そっと抱かせてもらう。(寛容・注意力・謙虚)

#### 普通の世話

グループごとに一週間交代で担当する。3学級までは、「自分たちの動物」との意識が保て効果が上がるが、4学級以上の場合には当番の回数が少なくなり、効果が得づらくなる。他に生活科でモルモットなど小型哺乳類を飼うなどの工夫が必要だろう。

休日は、保護者と子どもと一緒に世話する体制を整える。3学級もあれば、一組の親子は年に数回の分担で終わるし、子どもの大事な動物と一緒に守ることで親子の絆も深くなる。また、ケージ飼いの小動物は、週末にホームステイさせる。

なお保護者への事前調査では、「全員で平等に当番を担当すべきだ」との回答が一番多い。

## 2) 2学期

導入授業で動物に関心を持った子どもたちは、日常の世話を通じて動物に愛情がわき、その健康を常に気にするようになる。同時に、思いやりをもって様々な疑問に意欲的に関わっていくが、大事に思う動物のために必死に関わるため、観察や認知能力が高まり良い作文や絵を描く。また理科的探求心で獣医師への質問を持つ。テーマ別の調査は、新聞やPPTにまとめられ、公開授業に繋げる。

## 3) 学期末

下級生への「飼育引き継ぎ集会」では、「世話してきた動物を大事に扱って欲しい」との思いから、クラスや班ごとに動物の性格や体・動物間のもめ事・環境への配慮・世話の工夫などのテーマ別にまとめて下級生に伝える。その後1ヶ月、一緒に世話をして技術を伝える。

## 3 作文にみる動物飼育活動の影響

飼育導入授業の後、掃除や世話や交流を通じて愛情を育む中で、子ども達は心を揺さぶられ、言葉や文章があふれるようになってくると担任は評している。飼育開始7ヶ月後に書かれた作文の抜粋を掲載する\*<sup>3</sup>。これらの作品には、自分と動物そして先生方など多方面からの気持ちや行動が書かれている。これらは、東京都教育委員会と獣医師会が開催した動物飼育作文コンクールで表彰された。

### 1) 学年飼育の学校の作文抜粋

#### 柳沢小学校3年(総合の学習)

私が始めてにわとりとうさぎにさわった時は、暴れて(こわいな~にわとりとうさぎもこわいのかな。)と思いながらさわっていました。でも獣医さんの言うとおりに抱いてみると暴れるのをやめておとなしくなってわたしもだんだんかわいく思えて、早く飼育をやりたいと思いました。3年生になって飼育が始まりました。最初に掃除をしたり、ふんを取

ったりするのを見て(こんなことするんだ~ちょっとやだな。)と思ったけど、やってみると楽しくてにわとりとウサギが気になるようになりました。

保谷第二小学校4年(総合の学習)

そして、ぼくがだんだん慣れてきたところに、前から具合が悪かったチャボのシルフィーがたおれました。……。教室についてみると、みんなしいんとしていて、「シルフィーががんばれ」と応援したけど、シルフィーは息も少ししかしていなくて、今にも死にそうでした。でもぼくたちは、ただいのるしか出来なくてほかに何も出来なくて、とても悲しくて、きんちょうして、しかも歯がゆかったです。

……。その日は「シルフィーは大丈夫かな」と、考えていてなかなかむれませんでした。次の日の……。二時間目あたりに副校長先生が、「シルフィーが元気になりましたよ」と、言いに来ました。ぼくはその言葉で思わず飛び上がりました。その時は心そこうれしかったです。その日中は、もううれしくてたまりませんでした。……。なんとシルフィーの病気が悪化し、シルフィーが亡くなったのです。……。「シルフィーは苦しみにたえながら良くがんばった」とか、「なんでシルフィーは今までずっとがまんしたんだろう。……

同 4年 女子(総合の学習)

一年生に動物とのふれあいを教えている時、とても怖がっている女の子がいました。体がかたまって動きませんでした。

「大丈夫だよ」としか言ってあげられなかったけれど、「動物の方がこわがっているから、急に羽をバタバタしたり、ウサギもビューンと走り始めたりするんだよ。やさしくしてあげれば大じょうぶ」と、言ってあげれば良かったと思いました。私も最初はチャボを持っていませんでしたが、やっと持てた時はふわっとあたたかくて、思ったより軽くて少しこわいと思っていたチャボの顔がかわいく見えました。……ただ見るだけでなく自分たちで飼育をすると、「命」をみているんだという気がして、こんなふうにいると動物の気持ちかわかってきました。

## 2) 飼育活動を重視しない学校

応募作品には進学重視校の飼育委員の作文があった。この学校の作品は文章の構築は確かだったが、制限文字 1600 のところ、他校と異なり応募者全員が 600 文字以下で、自校の飼育動物との交流ではなく、一日体験した移動動物園からの連想が書かれていた。字数の少ないのは、人に伝えたい事を持っていないと思われた。また自分の考えに終始し、生物への誤解が目立ち、心からの言葉や、自分自身を見つめる記述も乏しかった。

## 4 総合の授業への飼育体験活用と支援体制

飼育活動を命の教育の基本単位として活用するには、以下のポイントが重要である。

- 1) 学年担任が一年間飼育担当教師になるが、学校全体で「命ある教材」に配慮する環境をつくる。
- 2) 保護者の理解を得て、巻き込む。
- 3) 地域の獣医師会と連携して、助言と支援を得る。特に保護者の不安に対応するための

知識と技術を借りる。

4) 必ず保護者と獣医師の協力を得て飼育導入授業を行い、「動物の心と体への心遣い、基本的な知識」と「動物を安心させる抱きかた」を児童に体験させ、愛着を湧かせる。

#### 5 園・小学校の英断を

「学校の動物飼育は、良いのは分かるけど大変だから関わらない」と言う管理者や教諭が多いが、学校で培った算数や国語などの技術をどのように使うかが人として重要であり、その「人としての感性・人間力」を育てるのには動物との関わりも必須である。

「大変だから算数を教えない」という言葉はありえないと同様に動物飼育も考えるべきだろう。しかし、大変すぎる飼育は弊害を生むため、その大変さを解消し、子どもたちが動物とともに過ごし、良い刺激を受け取れる環境を実現したいと、私たちは全国の獣医師会員に地域の学校を支援するように発信してきた。現在、すでに自治体の過半数で獣医師会員が活動しており、学校が支援を求めれば得られる環境になってきている。

友達が精神を病むまでいじめる子どもたち、冷静に母親に毒を盛り続けた娘、逃げ回る同学年の女子を30分も追い掛け回して何回もナイフで刺して殺した高校生などの事件を考えれば、早急に、そして国中で、子どもに「愛情のある動物飼育で、相手の感情と身体を洞察させる」体験を与えたい。「10歳まで社会から守って丁寧に育てないと、10歳以降、その子から社会を守らなければならなくなる」という言葉を噛み締めて、世代間に亘る「命への感性のなさ」の連鎖を絶つために、まず小学校から英断を振り、全国の園・小学校で飼われているウサギやチャボたちを「教育」に活用したい。

#### \* 動物飼育と教育の研究会

\* 1 中川美穂子「家庭の飼育状況」(05年3月調査)HP学校飼育動物を考えるページ

<http://www.vets.ne.jp/~school/pets/05home-animl.pdf>

\* 2 中島・中川 無藤等「学校での動物飼育体験が子どもへの動物への共感性および向社会的行動の発達に及ぼす影響の検討」動物飼育と教育 第6号 P43-46 07年

\* 3: 全文はHP「学校飼育動物研究会」に掲載

<http://www.vets.ne.jp/~school/pets/siikukenyukai.htm>

P52 1段 左から4行目

血が通った生き物を最初に抱いたのは、

— >

血が通っているからだを抱いたのは、

P55 2段目 6行目から9行目まで  
字数の少ないのは、人に伝えたい事を持っていないと思われた。また自分の考えに終始し、生物への誤解が目立ち、心からの言葉や、自分自身を見つめる記述もとぼしかった。

—>

字数の少ないのは、伝えたい事がないと思われ、内容は、自分の考えのみで、生物への誤解や他人への批評が目立ち自身を見つめる記述はほとんどなかった。

P55 11行目

飼育活動を命の教育の基本単位として活用するには、以下のポイントが重要である。

>

作文例のような学年飼育を、命・心の教育として活用するには、以下の点が重要である。